

被害者たちの提訴 『未解決の戦後補償』より（この問題を扱った WebSite で補足）

一 毒ガス被害第一次訴訟 提訴（1996年12月9日）

松花江（74年発生） 牡丹江（82年発生）

東京地裁判決（2003年9月）...全面勝訴

高裁判決（2007年7月18日）...請求棄却だが、全体的かつ公平な救済施策を国に求める

最高裁判決（2009年5月26日）...原告らの請求棄却

二 毒ガス被害第二次訴訟 提訴（1997年10月16日）

黒竜江（50年発生） 拝泉県龍泉鎮（76年発生） チチハル（87年発生）

東京地裁判決（2003年5月15日）...被害の事実は認めるが日本政府に賠償責任はない

高裁判決（2007年3月14日）・最高裁判決（2009年5月26日）...原告らの請求棄却

三 チチハル毒ガス事件（2003年8月4日発生）提訴（2007年1月）

東京地裁判決（2010年5月24日）...原告の請求棄却

中国全土が広く結果発生を回避できなかったため国の作為義務を否定

東京高裁（2012年9月21日）...控訴棄却 最高裁で係争中

四 敦化毒ガス事件 提訴（2008年1月17日）東京高裁で係争中

東京地裁判決（2012年4月16日）...国に広範な裁量を認めて原告らの請求を棄却

五 茨城県神栖毒ガス事件（～03年3月発覚）

2012年6月20日和解成立

六 神奈川県寒川毒ガス事件（2002年9月22日発生）

<http://www.eic.or.jp/news/?act=view&serial=7145> 参照

2004年3月20日から環境省は神奈川県寒川町の旧日本軍相模海軍工廠跡地内にある小学校などの敷地内で、毒ガス弾成分についての環境調査を実施。旧相模海軍工廠跡地は、2003年11月に発表された旧日本軍毒ガス弾についての全国調査結果で、特に毒ガス弾が存在している可能性が高く地域特定の確実性も高い4地域の1つ。この他、茨城県神栖町、千葉県習志野市の旧陸軍習志野学校周辺も。

【環境省】

被害の特徴

戦争が終わって長時間経過し、平和な日常生活の中で一般市民（子どもも含む）が受けた被害であること

現在でも毒ガス事故は発生し将来も発生の可能性があること

環境汚染による広範な被害が起きる可能性のあること

被害の実態

一 身体的被害

* 気管支疾患から気道がんへ * 皮膚疾患 * 眼科疾患 * 免疫力の低下 * 中枢神経系・自律神経疾患 * 循環器障害 * 消化器系疾患

二 経済的損害・精神的損害

日常的なだるさや痛みで働くことができない。多額の医療費。周囲から借金。

家族の看病疲れ。経済問題。子どもたちに対する差別。

日本政府の戦後責任

一 毒ガスの製造

毒ガス製造の開始

陸軍では 1929 年頃から開始、1934 年頃から本格化。海軍では 1942 年以降から本格化。

毒ガスの種類

糜爛性ガス（イペリットとルイサイト）・催涙ガス・嘔吐ガス・窒息性ガス・青酸ガスなど 毒ガス兵器工場

陸軍：広島県大久野島の忠海製造所で生産、福岡県曾根製造所で毒ガスを砲弾に充填

海軍：神奈川県寒川村の相模海軍工廠などで生産

毒ガスの製造量

陸軍 6,616 トン（うちイペリット・ルイサイト混合剤 4,472 トン） 海軍 760 トン（同 520 トン）

二 毒ガスの中国への配備（現在判明している資料からわかる最小限の数字）

日本国内で製造されたイペリット・ルイサイト弾と混合剤の中国への配備量

ガス弾...中国東北 4 万 5032 発、その他の中国各地 7 万 7768 発、合計 12 万 2800 発

混合剤...中国東北 73.5 トン、その他の中国各地 75.2 トン、計 148.7 トン

配備された部隊・地域

奉天、ハルビン、牡丹江、チチハル、敦化など

三 中国での毒ガスの使用

日中戦争で 1937 年 7 月～1944 年 7 月、相当な規模の毒ガス戦を展開

四 日本軍による毒ガス兵器の組織的遺棄

遺棄隠匿の支持命令 元兵士等の証言

五 中国政府の要求に何ら答えず、危険を放置

被害者の要求を実現する政策形成へ

民主党政権ワーキングチーム...国内外の被害者を含む救済スキームの検討

2010 年、政務官が被害者に会い、化学兵器被害解明の研究推進制度、医療支援・生活支援の被害者救済制度、化学兵器被害防止のための調査情報収集について検討を約束

1995 年化学兵器禁止条約批准

1999 年 日本政府は中国に遺棄した化学兵器の回収・無害化を約束し、遺棄化学兵器処理事業を発足。

廃棄義務の履行は 2007 年から 2012 年に延長

遺棄化学兵器処理事業...発見された兵器の調査と保管、無害化する処理施設の建設準備に毎年 100 億円の予算。しかし、被害者等に対する救済制度は存在しない。

『一人ひとりの大久野島』（行武正刀著）より

ゆくとけまさと

行武正刀(1934～2009) ... 1962 年から約 40 年間、忠海町(大久野島の対岸の町)の病院に内科医として勤務し、患者の訴えを聞き取った記録を残した。

「毎朝、毎朝、潮が押し寄せるように小病院を毒ガス傷害者が受診する。猛烈な咳と共に膿性のタンをペッと吐き出す慢性気管支炎、また苦しそうにヒーヒーと肩で息をし、肋骨の浮き出た胸を叩いてみると、まるで空箱を叩くような肺気腫。教科書でも読み、教室でも講義を受けて赴任してきたが、こんな重症患者が来る日も来る日もやってくるとは思ってもみなかった。...」

本人の死後、娘らが意志を継ぎ、2000 人分の証言の内、500 名に連絡、277 名から掲載許可を得る。